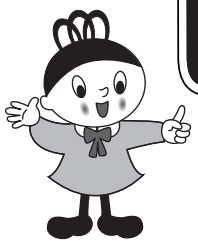
家庭の生ごみを楽しく減量

改訂 2013.10



しんぶんコンポスト

⇨ 新聞紙 ＋ 買い物かご ⇦

「甲府市」と「ちょぼら･くらぶ」の協働事業

1．「しんぶんコンポスト」とは

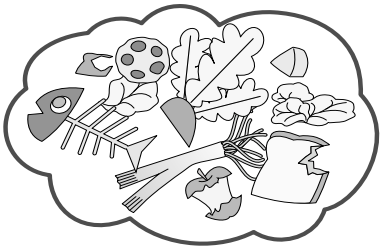
家庭から毎日でる生ごみ。高価な処理機を購入しなくても、手作りの材料で生ごみを分解して堆肥化するのが「ダンボール・コンポスト」。低コスト・簡単・臭わない・電気を使わない、などの理由から全国的に広がりつつある生ごみの処理方式です。

『しんぶんコンポスト』とは、甲府市内のボランティアグループ「ちょぼら・くらぶ」が、この処理方式の課題であったダンボール箱の耐久性や使用済みダンボールの廃棄などの問題点を改良考案した新方式です。

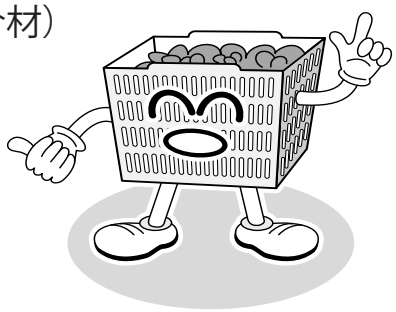
『しんぶんコンポスト』は、ダンボール箱の替わりに新聞紙とレジカゴを使って、生ごみを投入する容器を作るのが特徴で、この方式ならガムテープでダンボール箱を補強する必要もなく、また使用済みのダンボール箱をごみとして廃棄することもない環境に優しい方式であることから、甲府市では生ごみの減量方法のひとつとして「ちょぼら・くらぶ」と連携して生ごみの減量化を推進することになりました。

（▶コンポスト＝生ごみなどの有機物を微生物の力で分解した堆肥）

2．用意するもの



◆ 新聞紙 (15 枚程度)
◆ レジカゴ（同じものを２個）
◆ 基材（ピートモスともみがら燻炭の混合材）
◆ 布カバー（不織布や風呂敷）
◆ 幅広のゴムひも
◆ セロテープ・ 糊・ハサミ
◆ 園芸用スコップ
◇ 土壌温度計（あると便利）

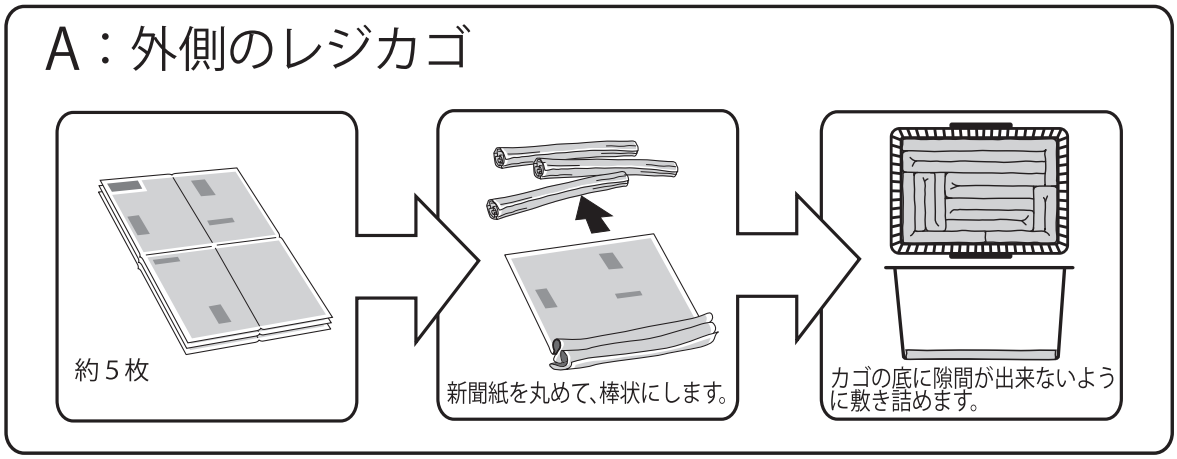


3．作ってみましょう

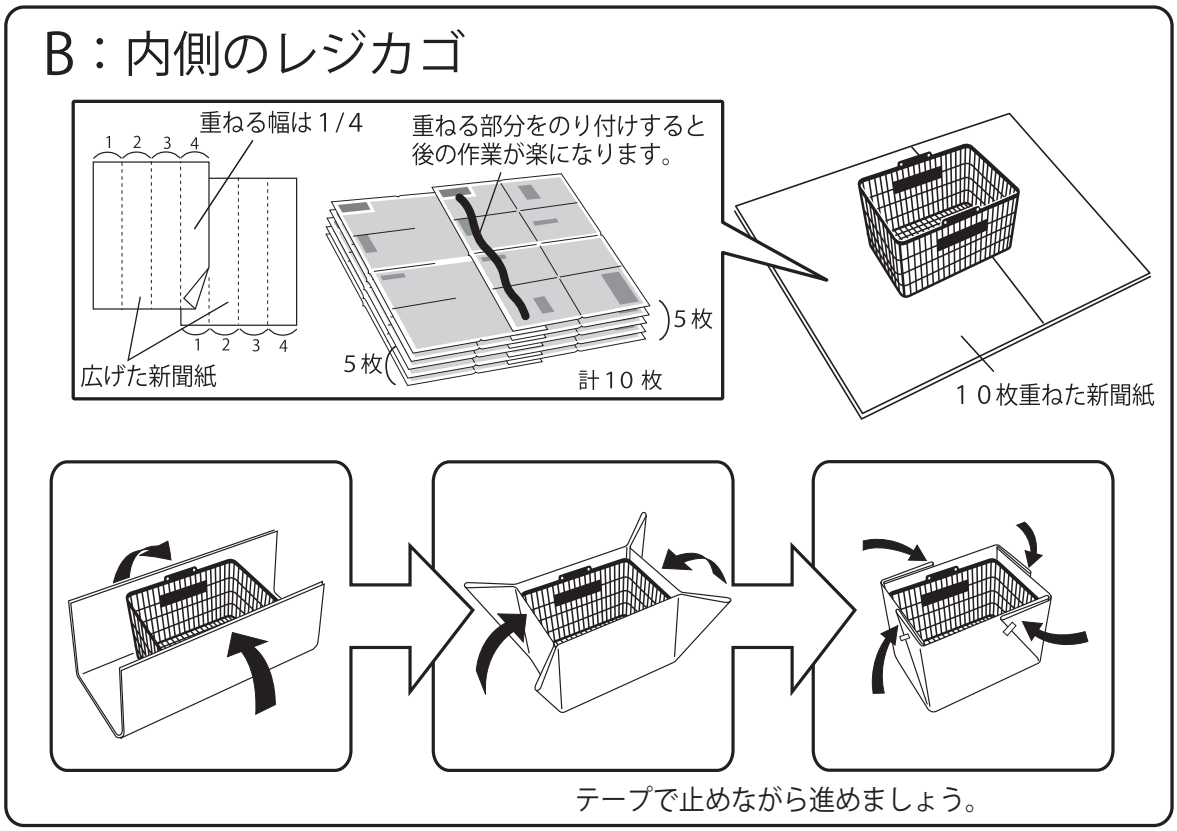
（1）容器を作ります

生ごみを投入する容器は、「レジカゴ」を重ね合わせた隙間に「新聞紙」を挟みこんだ形の容器を作ります。糊・セロテープ・ハサミを使って図解を見ながら作ってみましょう。

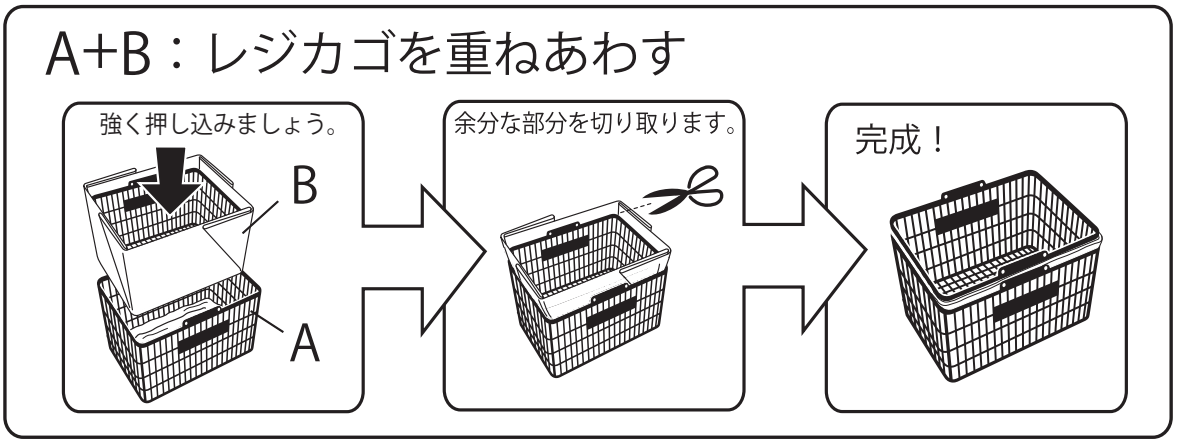
STPE ①「レジカゴ」の取っ手を外し、重ね合わせた時にできる底の隙間を埋めるための作業をします。



STPE ②「レジカゴ」の外側に張り合わせた新聞紙を仮止めします。



STPE ③ 図解 A の「レジカゴ」に図解 B の「レジカゴ」を、“ ゆっくり ” と “ 強く ” 押し込み、はみ出た新聞紙をハサミでカットします。



（2）**生ごみ処理の材料「基材」を容器に入れます**

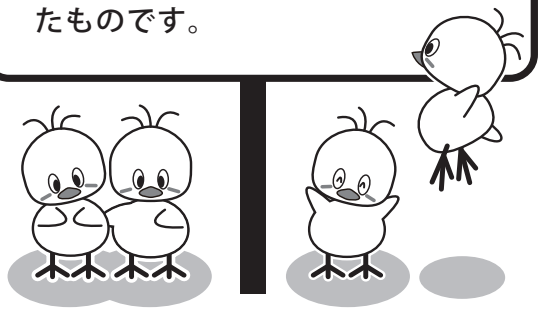
生ごみを分解させる基材は、ピートモスともみがら燻炭を３：２の割合で混ぜ合わせたものです。容器に対して基材を８割程度入れてください。容器いっぱいまで基材を入れてしまうと生ごみが入りません。

（3）**容器に被せる布カバーとゴム**

容器に被せる防虫用の布カバー（不要になった風呂敷やバスタオル・シーツなども代用できます）と、布カバーを止める幅広のゴムひもを用意します。

ちょぼら・くらぶ

まちづくり支援や環境リサイクル推進活動などを中心に活動している団体。名称の「ちょぼら」は、「ちょっとボランティア」を略したものです。



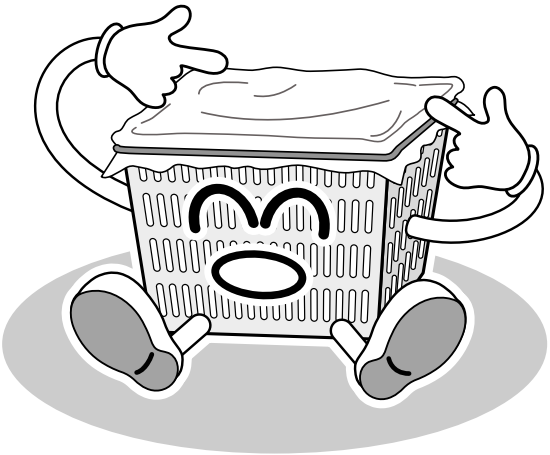
4．生ごみを投入しましょう

- 台所から出るほとんどの生ごみを入れることができます。また、新聞紙が余分な水分を発散させるので、生ごみを “ 水切り ” する必要もありません。
- 基材が生ごみの水分を吸って “ しっとり ” している状 態がベストです。
- １日の生ごみの投入量の目安は、５００ｇ前後です。家族が多いご家庭は、容器を２箱用意して交互に入れてください。
- 園芸用スコップを使って基材全体をかき混ぜたあと、基材の中央部を掘って、生ごみを投入し基材と混ぜ合わせながら埋め戻してください。

5．「基材」の温度や湿度で置き場所を

- 容器を置く場所は、雨のかからない風通しの良い場所に置きます。
- 基材の温度や水分量を観察しながら、発酵に適した場所に置いてください。
- 夏は明るい日陰に、冬は日光が当たる場所に置きます。

6．発酵を促進するには



- 生ごみの投入前にスコップで全体を、よくかき混ぜます。
- 生ごみを入れない日でも、かき混ぜることで、基材に空気が入り分解が促進（好気性発酵）されます。
- 野菜の芯などの硬いものは、細かく刻んで入れます。
- 毎日、しんぶんコンポストにエサ（生ごみ）をあげるイメージです。
- 発酵分解には、カロリー（栄養分）と適度な水分が必要です。
- 旅行などで、生ごみを入れなかった。数日間、かき混ぜることができなかったときには、基材が締って固まっている場合があります。このときは、基材全体をもみほぐしてから再開してください。

7．分解の遅いもの、分解しないもの

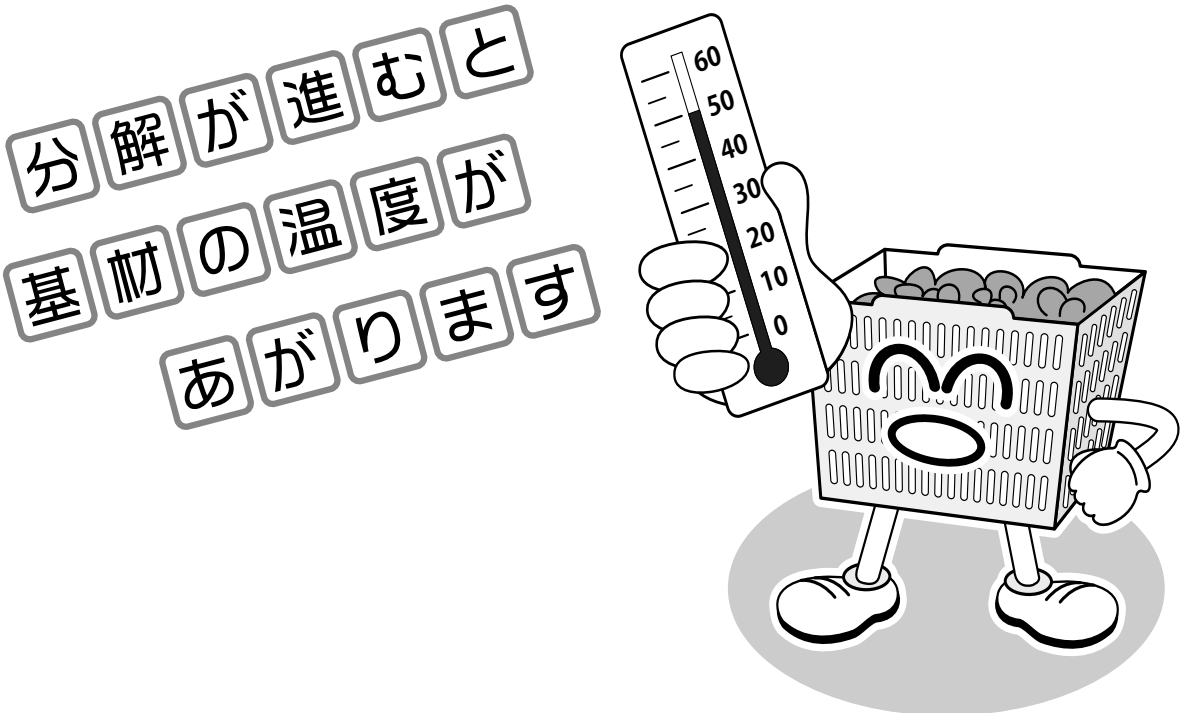
- 魚の骨は、分解に時間がかかりますが、完成した堆肥の肥料成分（リン酸）になります。鶏・豚・牛などの骨は入れないでください。
- ミカンや玉ねぎの皮などは、抗菌作用があるので他の生ごみよりも分解に時間がかかります。
- 貝殻や卵の殻、果物の種子などは分解されません。
- 塩分の強いもの（漬物や味噌汁）も分解されますが、完成後の有機質肥料としては不向きです。

８．水分と温度について

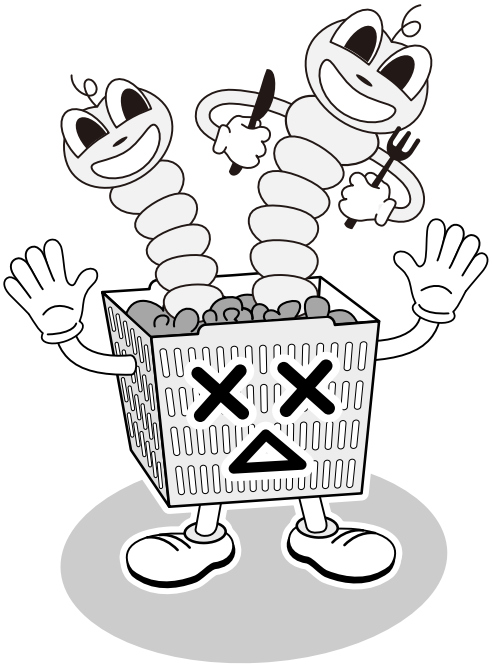
- 夏は１週間、冬は２週間くらいで分解が始まります。（白カビが発生）
- 分解が促進してくると、基材の温度が上昇（３５℃～６０℃）してきます。
- 基材の湿度は、握って固まる程度の水分が必要です。乾燥気味の時は、水分（水や米のとぎ汁など）を補給します。逆に湿り気味の時は、生ごみの投入量を控えたり、水切りをして水分の調整をしてください。

９．分解が進まない！　温度が上がらない！

- ごみの量が多いとき、寒い時期などは、生ごみを細かくきざんで投入すると分解が促進され基材の温度が上がります。
- よくかき混ぜているつもりでも、底の方は混ざりにくいものです。そんな時に有効な方法は、新聞紙やビニール袋の中に基材を全部あけて、よくもみほぐしてから箱にもどすと分解が促進されます。
- 糖質、炭水化物、脂っこいもの、魚のアラなどのカロリーの高い生ゴミを投入すると分解が促進させます。
- 分解が進まない、温度があがらないときは、廃油（使用済み天ぷら油）や天ぷらカスを基材に混ぜると発酵温度が上がります。



１０．虫（ハエやミズアブの幼虫）の発生について！



- 布カバーをダンボール箱に被せ、「幅広のゴムひも」で止めて、虫の侵入を予防します。
- 虫が布カバーの表面に卵を産み付ける場合があります。布カバー表裏を間違えないようにしてください。
- 布カバーの表側に、始めた日付をマジックで記入しておくと、終了時期の目安にもなるので便利です。

《 虫が発生しても！　失敗ではありません！》

- 野菜屑や果物の皮などに、虫の卵が生み付けられている場合にも虫が発生することがあります。
- 基材が、よくかき混ぜられていないと未発酵箇所で虫が発生します。

《 発生した虫を退治するには！》

- 野菜屑などの加熱されていない物の投入を一時中止します。
- 全体をよくかき混ぜまて、分解を促進させて発酵温度を上げましょう。
- 油分の多い物など、カロリーの高い生ごみは基材中のバクテリアが大好きです。かき混ぜることで空気が中に入ると、いっきに発酵温度が上昇します。温度が高温になると、虫の卵や幼虫は死滅します。
- 布カバーに、防虫スプレー（網戸用など）を噴霧しておくと効果があります。

- 虫が発生したら、天ぷら油の排油（200cc～ 400cc）を基材にかけて、全体をよく混ぜ合わせます。一日に 2 回程度かき混ぜると基材中のバクテリアが油分を食べて温度が上昇（60 度以上）するので、虫の卵や幼虫は死滅します。
- 野菜屑などのカロリーの少ない生ごみを投入するときにも廃油を利用すると発酵が促進されて温度が上昇します。

１１. 投入を終了するタイミング

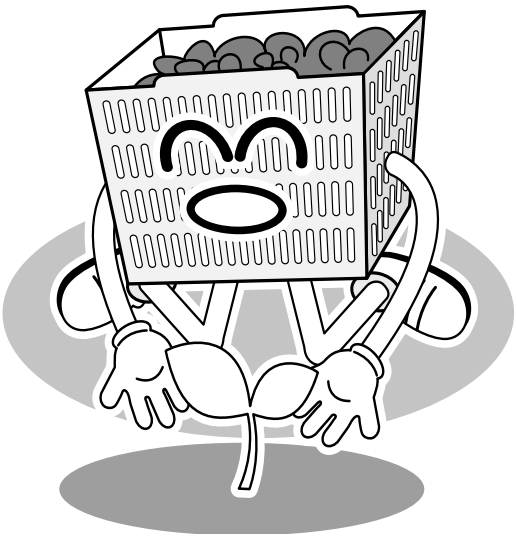
● 開始から約３月間、生ごみの総量 45kg くらいが終了の目安です。生ごみを入れても、分解が進まない、温度があがらない、生ごみの量が減らない、などが終了の合図です。

１２．終了後の熟成の方法

● 別の容器（大きめの植木鉢など）に基材を移し布カバーをして、未分解の生ごみを熟成（約１ヶ月）させます。
● 未分解の生ごみが入ったままだと完熟した堆肥にならないので、基材が乾燥（生ごみからの水分補給が無くなるので乾燥気味になります）していたら、水や米のとぎ汁をを補給しながら、かき混ぜて最後に投入した生ごみまで分解させます。

１３．堆肥としての使い方

● 一般に市販されている有機質肥料と同様の使い方をしてください。有機質肥料を使うと肥料成分のほか土壌の団粒化や保水性が増加して、植物の育成を助けます。
● 有機質肥料は、土と混ぜ合わせると効果を発揮します。使用する土の量に対して、完成した堆肥１０％～２０％を、よく混ぜ合わせた用土に苗を植え付けをします。



問合せ：甲府市環境部減量課　055-241-4327
資料作成：ちょぼら・くらぶ　ⓒ2013.10